

こども哲学おとな哲学 アーダコーダ 著

『こども哲学ハンドブック 自由に考え、自由に話す場のつくり方』

アルパカ、2019 年

119 頁、1,600 円（税別）

本書は、子ども哲学を実践したいと考えている人に向けた手引き書である。子ども哲学をはじめとした哲学対話の活動を社会の中で活用するためのプログラムを提供している「こども哲学 おとな哲学 アーダコーダ」が行っている「こども哲学ファシリテーター養成講座」のテキストを元に作られた。近年、年齢に関係なく各地で哲学対話（哲学カフェ）の実践があるが、本書は大人ではなく子どもと哲学を行うことに焦点をあてて書かれたものである。

本書の内容は 5 つに区分することができる。「PROLOGUE こどもの謎とであう」ではそもそも子ども哲学とはどのようなものであるのかについて、歴史や実際の声を紹介しながら説明している。「CHAPTER 1 事前準備」では子ども哲学を開催するために決めるべきことと準備することを説明し、「CHAPTER 2 こども哲学の進め方」では当日のこども哲学の流れを解説している。「CHAPTER 3 問いを深めるコツ」ではこども哲学の進行役であるファシリテーターについて、実践のコツがまとめられている。本書では心構えと

して「安心して話せる場をつくる」、「道に迷わないようにする」、「わからないを見つける」の 3 つを挙げ、それらを実現するためのコツを解説している。最後に、「付録」として実践事例や実際にこども哲学をやっている人たちのなかでよくある悩みを紹介しアドバイスを行っている。

こども哲学の実践は今や各地で行われている。そして実践者によってやり方は様々であり、オリジナリティ溢れる実践も数多くある。こども哲学をこれから始めようと思っている人にとって、すべてを自分なりの方法で行うことは困難であろう。本書は数ある実践のなかで多数の事例をもとに、うまくいった事例や共通している部分を抽出して具体的にまとめられている。そのため、こども哲学を始めようとする人にとって、本書に書かれている方法や心構えが助けになるだろう。

当然だが、「こども哲学について定義づけをしたり、権威づけをしたりするためのものでもありません」(p.35)とも述べている通り、ここに書かれた方法がこども哲学の唯一の方法ではないし絶対の正解でもない。しかし本書でまとめられた方法やコツは、初めて実践しようとしてこの本を手にする読者にとっての模範であり、実践の型となる。読者はまずはその型を真似て実践し、その上で自らのオリジナリティを發揮させた実践を行うことができる。本書はそうした自分なりのこども哲学をつくるための型として役に立つものになるであろう。

長谷部朋生（長野県赤穂高等学校）